

河童小僧

岡本綺堂

青空文庫

頃は安政の末、内藤家（延岡藩）の江戸邸やしきに福島金吾という武士があつた、この男、劍術柔術が得意で、随つて氣象も逞しい人物で、凡そ世の中に怖い物無しと誇つていたが、或時測らず一種の妖怪に出逢つて、なるほど世には不思議もあるものださすがと流石に舌を卷いたと云う。即ち五月さつきの初旬、所謂る降りみ降らずみ五月雨の晴間なき夕ゆうべ、所用あつて赤阪あか辺まで出向き、その帰途かえりに葵あおい阪ざかへ差掛ると、生憎に雨は烈しくなつた。

当時の人は御存知あるまいが、其頃そのは葵阪のドンドンと云つては有名なもので、彼かの溜池の流れを引いて漲り落つる水勢すさまじく、即ちドンドンと水音高く、滝なすばかりに渦巻いて流れ落

つる水が、この頃の五月雨に水嵩増して、ドンドンドウドウと鳴る音物すごく、況まして大雨の夜であるから、水の音と雨の音の外には物の音も聞えず、往ゆ来きも絶ええたる戌いぬの刻頃、一寸先も見え分かぬ闇を辿つて、右のドンドンの畔ほとりへ差掛ると、自分より二三間先に小さな人が歩いて行く。で、自分は足早に追付いて、提灯をかざして熟視よくみると、年のころは十三四の小僧が、この大雨に傘も持たず下駄も穿かず、直ひたぬ湿ぬれに湿ぬれたる両袖を搔合せて、跣はだし足のままでびたびたと行く姿、いかにも哀れに見えるので、オイオイお前は何処どこへ行くと脊後うしろから声をかけたが、小僧は見向きもせず返事もせず、矢はり俯向きしまま湿ぬれて行く、此方こなたは悶じれて、オイオイ小僧、何処へ行くのか知らぬが、斯この降ふる雨るのに尻も端折ら

ずに跣足はだしで歩く奴があるものか、身軽にして威勢好く歩けと、近
 寄つて声を掛けたが、この小僧やはり何とも云わぬ。唾か聾耳か、
 さりとは不思議な奴、兎も角もそんな体裁だらしない風をして雨の中を
 歩く奴があるものか、待て待て、俺が始末をして遣ると、背後か
 ら手を伸して其その後うしろづま 褻まを引あげ、裳をクルリと捲る途端にピ
 カリ、はツと思つて目を据えると、驚くべし、小僧の尻の左右に
 金銀の大きな眼があつて、爛々として我を睨むが如くに輝いてい
 るから、一時は思わず悸然ぎよつとしたが、流石さすがは平生から武芸自慢の
 男、この化物奴めと、矢庭に右手めてに持つたる提灯を投げ捨てて、小
 僧の襟髪掴んで曳とばかりに投出すと、傍かたえのドンドンの中へ真まつき
 逆かさまに転げ墜ちて、ザンブと響く水音、続いて聞ゆるは力力

カカと云うような、怪しい物凄しい笑い声、提灯は消えて真の闇。

おの 汝れ化物、再び姿を現わさば真二つと、刀の柄に手をかけて霎

ばし 時の間、闇くらき水中を睨み詰めていたが、ただ渦巻落つる水の音の

みで、その後は更に音の沙汰もない。ええ忌いまい々しい奴だと呟き

ながら、其夜そのは其まそのまに邸やしきへ歸つたが、扨さてよ能く能く考えて見ると、

あれが果して妖怪であろうか、万一我が驚愕おどろきと憤怒いかりの余りに、

碌々に其その正体も認めず、遑はやまつて真実まことの人間を投込んだのではあ

るまいかと、半信半疑で其夜そのを明し、翌朝念の為に再び彼かのドン

ドンへ往つて見ると、昨夜ゆうべに変わらぬは水の音のみで、更に人らし

い者の姿も見えぬ、猶念の為に他の人々にも聞合せ、流れの末を

も其それぞれ取調べたが、小僧は愚か、犬の死骸さえ流れ寄つたと

云う噂も聞えぬ。で、若し真実まことの人間とすれば、右の如き大雨と云い夜中と云い、殊ことに彼のかドンドンの如き急流ふかみの深淵ふかみに於て、とて迎も無事に浮び上れよう筈も無し、さりとして其死体そのの見当らぬも不思議、正しく彼の小僧は河童であろう、イヤ獺かわうそであろうと、知る者何れいはずも云い伝えて、其その当分は夜に入つて彼のかドンドンの畔ほとりを通る者もない位で、葵阪のドンドンには河童が住むという評判盛さかんであつたが、其その後別に怪しい噂も無かつたのを見れば、河童小僧、飛んだ目に逢つて懲こりごり々したのであろうか、兎にかく其小僧そのの尻に金銀の眼が光つていた事は、福島金吾確かに見とどけたと云う事。

因みに記すも古めかしいが、右の溜池界限には猶一種の怪談が

あつて、これも聊いささか前の内藤家に關係があるから、併あわせてここに
お嘸し申そう、慶応三年の春も暮れて、山王山の桜も散尽くした
頃の事で、彼かの溜池の畔に夜な夜な怪しい影がボンヤリと現われ
る。もつとも其そのころ頃の溜池は中々広いもので、維新後に埋められ
て狭くなり、更に埋められて当時の如く町家立ち続く繁華の地と
なつたが、慶応頃の溜池は深く広く、其末そののドンドンには前記の
如く河童小僧さえ住むと云う位、其の向う岸即ち内藤家の邸やしきの裏
手に当つて、影とも分かず煙とも分かぬ朦朧たる物が、薄墨の絵
の如くに茫として立迷つているのを、通行人が認めて不思議不思
議と云い嘸す、其その評判を同邸の家中の者が聞伝えて、試みに赤
坂の方へ廻つて見渡すと、何さま人の噂に違わず、影か幻か朦朧

たる物が水の上に立っていて、其その形さながら人の如くであるから、何れいずも唯だ不思議だ奇怪だと云うのみであつたが、念の為に小舟を漕こぎ出して其影そのの辺あたりに近づいて見ると影は消えて何にもない、扱さて又旧の岸へ歸つて見ると、彼の影は依然として水の上に迷つている、これは恐らく水中に何物か沈んでいるのではあるまいかと、一同協議の上で、その翌あくる朝更に小舟を漕こぎ出し、夜な夜な影の迷あたりう辺そこを其処ここか此処ここかと棹で探ると、緑伸びたる芦の根に何か触る物がある、扱さてはと一同立騒いで直ちに此これを引きあげること、思いきや此これは年頃二十三四とも見ゆる町人風の男で、荒縄を以て手足を韃ひし々と縛られたまま投込まれたものと覺しく、色は蒼ざめ髪は乱れ、二目と見られぬ無残の体で、入水後已に幾日を

経たのであろう、全身腐乱して其の臭氣夥多おびただしい、一同アツと顔見わたせたが兎も角も其死体を昇かき上げ、上に其次第を届け出いて、それぞれ詮議に手を尽つくしたが、この男は何者とも分らず、随つて其の死因も分らず、いわんや其の下手人も分らず、詮議も竟ついに其なりけりに済んで了つたとは、何なんぼう哀れなる物語。で、彼の怪しい人かげは、正しく此の水死者の幽魂が夜な夜な形を現わして、未来の救護すくいを乞うたのであろうと云う噂で、これを思えば死者に靈無しとも云われまいと、現在その死体を引きあげた一人の昔噺。世にはかかる不可思議の事もあるものか。

（『文藝倶楽部』02年5月号）

* へ日本妖怪実譚より。署名は「不語堂」使用。

青空文庫情報

底本：「文藝別冊「総特集」岡本綺堂」河出書房新社

2004（平成16）年1月30日発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年5月号

※初出時の署名は「不語堂」です。

入力：hongming

校正：noriko saito

2004年7月15日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

河童小僧

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>